

第1 検討部会 会議録

会議の名称	第2回 第1 検討部会
開催日時	平成19年8月23日(火)午後6時11分から午後8時25分まで
開催場所	川口市職員会館 3階会議室
出席者	(部会長)金井副委員長 (委員)池田委員、砂沢委員、落合委員、金子委員、神尾委員、佐藤(一)委員、林委員、宮原委員
会議内容	・川口市史(戦後～昭和50年ごろまで) ・川口市政の特色
会議資料	・川口市史(戦後～昭和50年ごろまで)
発言内容	<p>川口市史について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦後川口を語る会は、どんな人が集まり、どのような内容が市政に反映されたのか。 ・市民と言っても、経済団体の有力者の集まりだったのではないか。 ・昭和40年代は保守系といいながら福祉が推進されるなど革新的なことをよくやった時代でもあった。 ・鋳物に代わる産業への転換を市はどう考えたか ・それに関連して昭和41年の開発基本計画などの内容を見てみたい。 <p>川口市政の特色について</p> <p>鋳物業界と政治とのつながり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歴代市長で無所属の人は2名のみでそれ以外は、皆、自民党系。戦後を通じて革新系の首長はいない。 ・鋳物会社の社長がほぼ歴代の市長となっている。 ・鋳物業界の影響を受けて、戦後、各市長は産業経済には力を入れていて、不況になると高額の資金融資をしていた。 ・戦後早くから鋳物組合が力を持っていた。組合の発起人は組合を起こしてすぐに参院選に出た。 ・鋳物の親方(社長)の連携が強かった。親方同士の集まりで話し合い、政治家を輩出してきた。市議会議員の約7割を占め、更にはその集合体から県、国へとつながるピラミッドを支えていたのが、鋳物である。また、鋳物の親方を支えるため、家族、下請けを含め家族ぐるみで候補者を支持したので投票率も高かった(70%以上、多いときは80～90%) ・産業構造が変化した、鋳物工場より機械工場が多くなった今も、川口の政治は鋳物業者が有力者である。鋳物をやめた後もマンションの地権者やオーナー等として影響力がある。鋳物工場は倒産するのではなく、転廃業するのである。

保守系の政治

- ・戦後のこの時期の川口市議の半数以上は常に自由民衆党 自民党。無所属が多い市議会議員選挙で政党を名乗るのは全国的に珍しい
- ・政党を名乗らないと公認されなかった。
- ・中小零細企業の労働者を自民党（自由民衆党）に取り込んでいった。
- ・昭和 40 年頃参議院議員候補者で県と市の自民党で対立したことがあった。川口の方が破れた結果、巻き返しを図るため、町会の組織化を強化した。
- ・昭和 40 年代には、大野市長が県知事選への出馬をにらんで、市内を 22 地区に分け、その公民館地区ごとに自民党議員を輩出する体制を整えた。

川口の象徴としての鋳物（キューポラ）

- ・川口は鋳物のまち。景気の変動を受けやすい産業構造だった。
- ・鋳物は、景気の良いときは人件費率もかなり低かったと思う。
- ・鋳物工場の労働者の多くは中学卒業した集団就職で川口に来た。たとえば、大泉氏のところは山形から多くの人が出てきた。
- ・小学校の社会科見学は鋳物工場だった。キューポラがなくなったら寂しいという気持ちがあった。
- ・学校の写生コンクールで風景画にキューポラを入れると入選した人もいたようだ。
- ・住民意識として、キューポラには地域ごとに温度差があったのではないか。間近に工場がない住民にとっては、キューポラは川口を象徴する（美しい）景色の一部だった。工場に近い住民にとっては、キューポラは空気・水を汚す存在だったかもしれない。
- ・審査委員がそもそも鋳物関係者だったのであろう。その意味で、ステレオタイプ的なイメージが形成されていたともいえよう
- ・旧芝川は、昔は泳げたが汚くなったのは生活雑排水が原因である。
- ・じん肺患者は昭和 40 年代に急増したわけではなく、以前からいたのではないか。
- ・当時は公害、環境への意識が全国的に低かった。今思えば公害問題は深刻だったかもしれないが、当時の感覚からすれば、鋳物は有力な雇用の場であり、守るべきものだった。
- ・昭和 40 年代のマンション反対は、鋳物工場を守るためだった。

最近の変化

- ・鋳物工場は広大な土地を持っていた分、マンション地として適していた。
- ・鋳物工場の跡地にマンションが次々と建ち、夜間住民が多くなった（現在 1/4 がマンション住民）。
- ・昭和 22 年には川口プランを全国発表するなど全国に先立つ取り組みが

盛んであった。

- ・今の川口市の投票率は低く、特に市議会議員選挙など地方選挙ほど低くなる。
- ・一方では、国政選挙の投票率が高い。駅頭に立っている人が当選して、地元を地道にまわる選挙スタイルが弱くなっている。こうした傾向は 8 年前から見られる。
- ・市の教育を求めずに私学を求めるといった傾向があるが、深刻に考えないといけない。
- ・ここ 10 年で中学から私立へいく傾向は顕著である。
- ・子どもの学校は都や私立に行かせる人(特に教育熱心な親)が増えた。
- ・母親は、子どもを産んで育てていくうちに、ネットワークを強くしていき、子どもが大きくなった後も残り、それが町会活動へと移行する。しかし、最近は PTA 活動も地元で育たない(学校選択制のため、または都内へ通学する人が出ているため)

その他

- ・労働運動も県内の中核的存在であり、メーデーには荒川河川敷に何万人も集るなど、盛んだった。(大手企業の若手が運動)
- ・保守系の政治の一方で共産党の組織は、大きな会社などでは一部できていたが、職場を追われた人などが地域で活動していったものが変化していった。
- ・最近ではボランティアも盛んになってきたが、新旧住民の乖離は大きい。新住民同士でのいろいろなネットワークは広がっているが、新住民の方が友達を必要としているように見える。
- ・地域自治活動を牛耳っているのは、現在も旧住民であることが多い。(新旧住民がうまく交流できるかが課題)
- ・近時、川口市への新住民の流入は多く、急速に新住民のウェイトは高くなってきた。これにより、鋳物業界中心の旧体質と、それに支えられてきた市政は都市型にかわってきているのではない。
- ・元サラリーマンは優秀だが、それまで地域に出ていない分、旧住民と馴染みにくいところがある。
- ・経済の動きから 10 年くらい遅れて政治の動きになると言われている。旧鋳物業者は地主・不動産業に転換したのかも。また、新住民も出てきてから 20 年近くなる。そうした人たちが政治的にも意味を持ち始めて、今、旧住民の目にも明らかになってきたのである。
- ・永瀬前市長の施策(60 周年記念パンフ)のほとんどは実現した(ハード対策が多い)その間市債が多発され、今では市民 1 人 50 万円の借金となっている。

	次回のテーマ ・昭和 50 年代以降を中心に、川口市政の特色を見ていきたい。
次回以降日程	・次回は 9 月 6 日（木）18 時から、次々回は 9 月 19 日（水）18 時から。